

# ジンメル認識論における アプリアリ主義とラディカル相対主義 (その二)

Apriorism and Radical Relativism in Simmel's Epistemology (II)

池田 光義

Mitsuyoshi IKEDA

## 要旨

本稿(その一)「本誌第四十六号」を承けて、(その二)においては、ジンメルの認識論的ラディカル相対主義について論じる。まず、認識外在論と認識内在論の相互補完がその骨格を形成していることを指摘する。次にラディカル相対主義の〈真理〉概念を相互関係性テーゼ、対立・矛盾する認識の両立テーゼ、対立・矛盾する認識の相互補完テーゼ、不完全性テーゼと前提の相互補完テーゼ、統整的機能テーゼによって特徴づけ、その思想的含意・背景について論じる。さらに、ラディカル相対主義が認識論的多元論、枠組み相対主義、真理の整合論との点で異なるのかを明確にし、これらの思考が結局は実体主義、絶対主義の一変種に過ぎないことを示す。最後は、一般的な相対主義批判(ニヒリズムへの傾斜、認識の進歩の阻害、自己撞着・自滅)がジンメルの相対主義には無効であることを検討し、自己言及の原理がむしろラディカル相対主義の構造契機であることを明らかにする。

## 6. ラディカル相対主義の「真理」概念

ジンメルのラディカル相対主義（RRと略記）の重要な骨組みとして、認識外在論と認識内在論との相互補完を挙げることができる。<sup>1</sup> RRの認識外在論とは、認識を生過程・連関の中で基礎づける試みであり、進化的プラグマティズムを中軸としている。それは、人間の認識全体の確実性と信頼性を発生史的に確保することを課題としている。これに対し、RRの認識内在論の内実は、人間の認識が全体として確実に信頼しうることを前提にした上で、個別の認識（系）の確実性と信頼性が認識（系）と認識（系）との相互関係において成立していることを示すことにあると言える。

RRの認識外在論は前節で検討したので、ここではその認識内在論的主張を概観したいが、それにはかなりの困難が伴う。一八九六年付けリッカート宛ての書簡の中で、その近著『認識の対象』の送呈への謝辞を表した後、こう述べている。「認識論の究極の諸問題を、印刷できるまでに解き明かすという誘惑が去りません。この二、三十年のうちに貴兄に『相対主義論』を提示したいものだと思っています。その中で、貴兄に同意できる点やできない点など、思うところを述べたいものです」[GSG, 22:214]。しかし、この『相対主義論』は幻の書に終わり、彼の相対主義思想は様々な著作の様々な箇所、文脈に書き散らされることになるのである。以下、それらを綴り合わせ、RRの概略をテーゼ風に粗描してみる。<sup>2</sup>

(1) 真理に関する〈相互関係性テーゼ〉 [GSG, 1: 374ff.; 3: 17; 6: 115f.]。真理は個別の認識それ自体に内在する属性でもなければ、認識の外部に自存する実体でもない。それは認識と認識との相互関係にある。真理は個別的認識の内容そのもので決まる実体的規定ではなく、既に確実と見なされている多数派の認識群とまだ確実視されていない少数派ないは新規の認識との緊張関係の中で、個々の認識がどのような位置を占め、どのような機能を果たしているのかによって決まる認識の関係・機能規定である。認識の相互関係において個別の認識内容を入れ替わっても構わない。しかし、この相互関係の構造そのものは不変である……。この意味で、RRは、伝統的な絶対主義的、実体主義的真理観を否定し、関係主義的真理観に立つ。

(2) 〈対立・矛盾する認識の両立テーゼ〉 [GSG, 2: 118ff., 228, 374ff.]。同一の認識対象に関する相互に対立・矛盾した認識・判断・主張（あるいはその系）は対立・矛盾したままで、あるいは対立・矛盾しているにもかかわらず相互に両立し得る……<sup>3</sup>。しかし、ジンメルにとって、この二律背反が成立するのは、認識対象が非常に複雑で非線形的な特徴を帯びる領域、次元に限られていることを確認しておかなければならない。ジンメルが挙げるその典型的な認識領域は形而上学と（人間・社会科学革命の主役である）心理学・社会学である。カントはその批判哲学で、われわれが自らの認識能力を超えて形而上学の問題にかかわるとき必然的に二律背反に陥ることを示し、経験的認識と超経験的思考の間に厳格な線引きを要求した。これに対し、ジンメルは、形而上学的思

考においてだけでなく、経験科学の領野においても、その対象が複合性・複雑性の点で一定限度を超えると、二律背反が不可避的に帰結し、矛盾などの論理的思考規則が限定的にししか有効性を持たないことを見抜いたのである。すなわち、ジンメルのアンチノミー問題に関する思想上の意義は、思考において二律背反が必然的に生成するかいなかの臨界点は、思考の性格が経験的か超経験的かの区別にはなく、線形的か非線形的かを分かち境域に存することを看破した点にあるのだ。

(3) 〈対立・矛盾する認識の相互補完テーゼ〉。ジンメルにとって、そもそも対立する認識（系）が両立してしまうのは、複雑な対象を認識するにはわれわれの認識能力があまりにも一面的で限定されているからである。この点に関し、ジンメルのアприオリ思考の視点から重要なことが二つある。第一に、認識の基底的アприオリとなる根本的な概念や思考形式は人間の認識進化の初期段階において、今よりも遥かに単純な諸事情に関するきわめて限られた経験によって獲得されたものであり、複雑極まる現代の認識課題に対して十分に機能しきれないという、いわば〈アприオリ遅滞説〉をジンメルが示していることだ[GSG, 2: 136f.; 374; 9: 331]。第二に、各認識（系）はある特定のアприオリな前提に基づくが、この認識（系）は、同一問題にかかわりながら、別個のアприオリを前提にする他の認識（系）を必然的に否定し排斥することになる。それは、特定の根本概念にしたがって製作された一つの自己完結的な世界像であり、別のアприオリ概念にしたがって製作された他の世界像とは相容れないのである。別言すると、それには不可避的に世界認識

の独占指向が内在し、独善性が宿している。われわれの認識はその本性と構造からして既に排他的で世界覇権的なのである……。

アприオリズムのこの二つの視点から何が言えるかというと、人間の認識は、膨大な数量に及ぶ複雑極まる対象をとっても把握しきれないものではないといういわば量的な限界からだけではなく、それがアприオリな前提によって質的な制約を受けているという認識の構造そのものから、限界と一面性から免れ得ないと同時に、不可避的に相互に対立してしまうということである。ジンメルのRRの特徴は、この〈認識の一面性テーゼ〉から、一方では〈対立・矛盾する認識の両立テーゼ〉を立てると同時に、他方では〈認識（特に対立的認識）の相互補完テーゼ〉を主張する点である。人間の認識は、そのアприオリ負荷性によって宿命づけられた一面性と排他性ゆえに相互に補完し合わなければならない、と。その際に見逃されやすいのは、対立思考の相互補完には、単にその一面性を相互に揚棄し合うといういわば表側の意味だけではなく、その独占・独善傾向に対して相互に制約を加え合い、各々の妥当範囲・程度を相互に指定し合うといういわば裏側の意味もあるという点である。対立思考の〈相互補完テーゼ〉はその〈相互否定・制約テーゼ〉と表裏一体のものとして捉えられなければならないのである。個々の認識や認識系は、自己の有効範囲・限界を的確に示す仕組みを自己の内部に備えておらず、自己の限界表示を他の対立認識（系）との相互否定・制約の関係性に依存しているのである。対立思考の相互補完の思想が対立思考の安易で皮相な妥協や折衷や混合とは根本的に異なるとジンメルが強調する

とを [GSG 6: 113]、この視点を念頭に置いておくことを忘れてはならないだろう。

(4) 〈前提の相互基礎づけテーゼ〉 [GSG, 1: 376f.; 5: 67, 95f.; 9: 48f.]。このテーゼの基底には、非常に重要なジンメルの洞察がある。それは、認識あるは認識系は、そのアプリアリな根本的前提を自己の内  
部では正当化できないという〈不完全性テーゼ〉として表現できる。ある認識あるは認識系のアプリアリな前提を基礎づけるためには、確実に信頼できる一定のメタ・アプリアリが不可欠であるが、そうしたメタ・アプリアリはその認識あるは認識系の内部には見出されることはないのである。既に見たように、人間の認識全体のアプリアリを基礎づけるメタ・アプリアリは人間の認識全体の内部に求めても得られず、結局、認識の外部、生の実践的連関に求めることになった。個別認識あるは認識の個別系の場合はどうか。ここでもジンメルは相互性思考を展開し、認識(系)はその前提を相互に検証し基礎づけ合うという考えを提示するのである。別言すれば、いかなる認識・認識系であっても、その認識論的な本質構造から言って、自己のアプリアリな前提・基盤の正当化に関して他の認識(群)ないしは認識系(群)に依存しているという  
ことである。それは、対象認識(系)なのかメタ認識(系)なのかにかかわらず、原理的に、自己自身では正当化できない一連のアプリアリな前提の基盤の上でしか成立しない以上、自足的な孤立系、自己完結的な独立系ではあり得ないのである。この〈不完全性テーゼ〉と〈前提の相互補充テーゼ〉は R R の核心中の核心アイデアである。<sup>1)</sup>

さて、超越論のアプリアリ思考を人間・社会科学に適用、拡張することで複雑系・非線形問題に直面してしまうこと、そしてこの問題に認識論的・方法的に対処する必要性が R R の成立を促す一つの重要な要因になったことは、既に触れたとおりである。また、過去に目を転じて、そもそも思想史過程全体が、一元論と多元論、経験論と合理論、個人主義と集合主義といった二つの敵対原理の確執とその主導権の相互交替の繰り返しであったとジンメルは確認している [GSG 6: 93f.]。哲学史そのものが R R の諸テーゼの妥当性の証左であるかのようにジンメルの目には映っているのだろう。ジンメルが R R を抱懐するに至る思想的動機・背景についても一つ決定的に重要な事情に触れておきたい。それは、ドイツ世紀末・世紀転換期は、方法、主義、原理、世界像を巡る激烈な対立抗争の時代であったということだ。ジンメルが直接扱ったことのある事例に限っても、物理学における原子論とエネルギー論、経済学におけるメンガーの合理主義とシュモラーの歴史主義、精神・社会科学における抽象的・合理的方法と個性的・記述的方法あるは説明的方法と理解的方法、社会主義と自由主義などの抗争、論争がすぐに脳裏に浮かぶ。いずれの理論も、一定の根拠を有すると同時に一定の一面性や限界も抱えている。論敵への批判は舌鋒鋭く正鵠を得たものである一方、自己のよって立つ論拠や前提の正当化となると独善、独断の鉄面皮を貫いて怪しまない。しかも、両者の成否、優劣を裁定する高位審級の原理や基準は存在しない……。<sup>(a)</sup> 生半可な妥協や軽佻浮薄な折衷に流れない、<sup>(b)</sup> 懐疑主義や独断主義あるいは恣意的な多元主義や絶対主義にも淫しな

いという格率を保持しながら、こうした対立状況にどう対応するのが認識論的、方法論的に最強最善か、ジンメルのRRはこの問いに対する彼なりの解答でもあったと考えられる。

翻って、時代の思潮が相対主義や懐疑主義に深く浸潤されているという精神診断では、デイルタイ、ヴァインデルバント、リツカート、フツサールなどといった当時のアカデミズム思想界を代表する一連の思想家たちとジンメルとの間にさほどの懸隔はない。しかし、こうした学者連は相対主義に〈主観的で破壊的で頹落的な危険思想〉の烙印を押し、その殲滅を自己の思想的・学問的営為の中心課題の一つに据えていく。これとは対照的に、ジンメルは、哲学者として初めて[Kohinke, 1996: 475]、自己の立場を公然と「相対主義」と宣する。これは当時の学界状況を鑑みればあるいはアカデミズム人生をふいにかねないほどの尖鋭で急進的な態度であったが、それには確たる信念の裏打ちがあったのである。すなわち、①相対主義は、少なくとも目下のところは、歴史的に必然かつ必要な思想である。ジンメル自身、心理学化、歴史化、社会学化などの手法を駆使してこの思想の強化普及に参画する。②絶対主義的な相対主義批判は相対主義の否定的帰結に有効に対処できないばかりか、相対主義を自ら触発し、むしろその相対的な正当性と意義と機能を強めるだけである。③相対主義に伴う諸問題には、絶対主義の前提のみならず相対主義の前提そのものを相対化し、両者の絶対的対立を相対化すること、換言すれば、絶対主義のみならず相対主義そのものを徹底的に相対化することによってしか有効に対処できない……。

(5) 認識の(統整的機能テーゼ)ないしは(「」であるかのように「テーゼ)。RRの思考装置にある種の(相互)関係主義があることは論を待たない。(1) (4)で言及した一連のテーゼはこの関係主義の様々な変形と見なすこともできる。しかし、RRにはこの関係主義には見えない重要な原理、(統整的・発見的機能としての認識)というカントから継承・発展させた考えがある。それは、約めて言えば、(PはQである)という構成的な主張・判断・認識は、(PはあたかもQであるかのようにある)というように統整的、発見的あるいは仮説的な意味で理解されるべきだというものである。<sup>6)</sup>

さらに敷衍すれば、統整主義的理解では、①(PはQである)は対象P自体についてそれがQであると主張しているのではない。PがあたかもQであるかのように振る舞い、かわれと認識者に指示し要請しているのである。それは対象の性質そのものについての伝統的な意味での判断や主張ではなく、対象に対する我々認識者の態度、かわり方に関するメタ意識レベルでの方法的・規範的要請なのである。その際、Pが、現実には「Qである、つまり(PはQである)は実在と一致する可能性は意識的に否定、あるいは少なくとも不問・未決に付されている。そうした一定の振る舞い方、かわり方が、実践的・理論的な目的・意味に照らして順機能的であるのかどうか、さらにその順機能力が一定範囲で確実に保証されているのか否かが、当該認識の認識としての品質を決定するのである。こうした認識の統整主義的理解は旧来の命題主義的な認識観を根底から突き崩すラディカル性を内包しており、その点で例



えばパースのプラグマティズム的認識論に比肩し得ると言っても過言ではないだろう。

②統整的意味において理解された認識においては、もう一つの意味での要請・当為が働いている。それは、〈pはqである〉が最終的な構成的判断としてではなく、「どの到達点も、それがあたかも究極地点の一つ手前であるかのよう」に扱って「[GSG, 9:96]」、そこに滞留せずに相対化して認識を不断に深化、拡大させよ、という要請である。これは認識一般の仮説的性格と発見的機能との意識的な統一の把握という視点であるとも評価できよう。③〈あたかもであるかのよう〉に意識は、〈である〉意識の反省的あるいは方法論的なメタ意識とも言える。このメタ意識が確保される限り、一定の条件範囲では、つまり差し、当たりは、〈pがあたかもpであるかのよう〉を〈pはqである〉と換言・簡約し、その内容が実在と一致するものと見なしても構わない、つまり、生活世界でも科学的実践でも、直接的、個別的には、擬似実在論的に認識を遂行できるといふことである。<sup>7)</sup>

## 7. ラディカル相対主義と多元主義、枠組み相対主義、

### 整合説

カントがいかにアプリアリの種類を厳密に限定・固定化し、またアプリアリこそが経験認識の普遍性と必然性の担保であると強調しても、まさにそれゆえに、つまり認識の普遍妥当性をそのアプリアリな前提条件に依存させてしまうがゆえに、認識の前提条件<sup>11</sup>枠組みが異なれば別

様の真理が成り立つという枠組み相対主義が容易に懐胎されることになる。そして、一度、真理は認識主体の主観的な認識条件（この場合は文化、歴史、言語、概念などの枠組み）に依存して相対的であるという見地を容認してしまえば、枠組の種類に依拠しただけの多数の真理が両立するという認識多元主義にも扉が開け放たれることになる。この節では、ある意味で同じようにカントのアプリアリ思考の衣鉢を継ぐRRが認識論的多元主義や枠組み相対主義とどの点で異なるのかを明らかにしたい。そして最後に、RRの特質をより鮮明に浮き立たせるために、いわゆる真理の整合説との違いについて触れてみたい。

まず、RRと多元主義との相違について検討してみる。RRは、特定の認識系や方法原理を排他的・特権的に絶対化することを拒否し、「同一」対象について複数の認識系や方法原理が同時に成立しうることを認める点では、多元主義と通底するものがある。しかし、RRの観点から言えば、①〈真理性〉に関して複数の認識系の間で優劣が定まらない、あるいは複数の認識系が並存しうるのは、多元主義が自己錯認するように、それらのすべてがそれ自体で同様に〈真理〉であるからではない。それらが単独ではすべて同じように、一面的で不十分な認識であるに過ぎないからなのだ。〈真理の対等性〉ではなく、〈半可通と一面性の平等〉、〈可謬と修正可能性の平等〉が支配しているに過ぎないからなのだ。②多元主義は、原理的に、〈真理〉を僭称する認識系をすべて無条件に許容せざるを得ない。他方、RRの視点では、〈真理性〉を主張する認識（系）は少なくとも次のような一定の条件を満たすことが必要である。すな

わち、各認識系の内部でアプリアオリな前提である基本的な原理、概念、方法、規則などが貫徹していること、系内部の関連認識式・主張がそうした前提や系内外の一定の関連認識・主張と整合的であること。さらに、各認識系の妥当性の範囲、程度、限界についての方法的メタ認識が少なくとも暗黙的に含まれていることなどである。しかし、系内外の認識・主張は常に誤謬、修正、廃棄、代替の可能性を孕んでおり、また新規の認識・主張が付け加わることもあり、そうした認識・主張と整合性を維持しなければならぬような認識・主張も同様に誤謬や修正の可能性を晒され続けることになる。さらに、どの認識（系）も、その内容と（主張ないしは含意される）妥当性範囲との間に齟齬の生じる可能性を取り除くことはできない。こうした試練を生き残ることのできる認識系の数は、一般の多元論が想定するよりも遥かに限定されることになるだろう。実際、ジンメルは、対立・競合する認識系は、二つに収斂するか、その混合や組み合わせに帰着すると考えている〔GSG, 5:197〕。ジンメルが生きたドイツ世紀末・世紀転換期には、様々な理論・思想分野において二つの学派・陣営に分かれて激しい方法論争や自然観・社会観闘争が繰り返されたことは既に言及したとおりだが、この理論・思想状況がこの点でも強く影響していると言えるだろう。<sup>(8)</sup>

③ 既述のように、RRでは、どのような認識系であっても自己のアプリアオリな前提条件は自己の系内部では基礎づけできず、したがってその正当化（ひいては系全体の正当化）は他の認識系に依存し、他の認識系との相互関係によってしか実現できないと考えられている。しかし、多

元主義はこの側面を完全に等閑視する。各認識系を独立自存の自己完結系に実体化し、他者系との相互関係でしか成立しないはずのアプリアオリな自己の前提を、自己自身に内在して自己完結する絶対的な基底に仕立て上げているのだ。この意味で、多元主義も結局は実体主義的、絶対主義的な真理観の一変種に過ぎないことになる。<sup>(4)</sup>多元主義も、メタレベルでは対抗思想である一元主義を多元主義的に許容することができず、絶対主義的に排除しようとする。つまり、多元主義は、多元主義を容認する認識系群の内部では多元主義的寛容を示しても、メタレベルでの基本的枠組みにおいては非・反多元主義との関係で排他的、専断的な単独支配を主張し、反多元主義的な態度を露呈してしまうのである。別言すれば、多元主義はメタレベルでの自己適用に耐え切れぬということである。その隠蔽され粉飾された独断的、独善的本性が自己言及による自己撞着の形をとって顕在化するのである。これに対し、RRは、後述するように、メタレベルでも相対主義を徹底できるし、大方の予断とは裏腹に、自己適用にも耐えられるのである。<sup>(5)</sup>RRから見れば〔GSG, 6:107f.〕、多元主義あるいは二元主義が瀰漫すると一元主義への要請が生じる。生じないのであれば、それは多元主義がいまだ未成熟な状態であることを意味する。また、多元主義が喧伝されるということは、いまだに一元主義的傾向が強いということでもある。多元主義の必要性や意義や機能は、一元主義との相互関係で決まるのであって、多元主義それ自体に実体的に存するわけではないのだ。

次に、RRと枠組み相対主義との違いについて検討してみよう。両者

にはもちろん、相対主義的スタンス、すなわち各認識(系)の(真理)が認識主体の認識論的な前提条件に依存して相対的であるとすると立場が共有されている。しかし、①枠組み相対主義では、この前提枠組みそのものは絶対的な(真理)として措定され、その(真理性)は正当化不要でかつ正当化不能な与件として絶対化されている。また、②相互に対立する認識(系)は、まさにその特定の前提枠組みによる被規定性・被構成性ゆえに、内容的・事柄的に一面性を免れえず、したがって相互制約・補完を必要としていることが閑却されている。さらに、③相互に対立する認識(系)がそれぞれの前提枠組みの正当化に関して相互に依存していることも、枠組み相対主義は看過している。要するに、RRの観点から見れば、枠組み相対主義は、第一に、与えられた前提枠組みとの関係においては各認識(系)を相対化しても、この枠組みそのものは批判的に相対化することなく独断的に絶対化しているのである。第二に、特定の枠組みとそれに拘束された認識(系)をそれ自体で成立する自立体・自己完結体に実体化している。少なくともこの二点において、枠組み相対主義は、その一般的評価あるいは自己評価に反して、その根源においては絶対主義的、実体主義的な傾性を払拭しきれていないのである。④自己の枠組みに対する相対主義的スタンスの不徹底ゆえに、それはまた自己言及の蟻地獄に嵌り、自己撞着に窒息する。畢竟、枠組み相対主義は、RRの観点からすれば、(生半可で不徹底な相対主義)あるいは(相対主義の仮面を被った絶対主義・実体主義)に過ぎないのである。

最後はRRの真理概念と整合説の真理概念との相違についてである

が、この整合説の魅力は、何と言っても、その関係主義的な思考にある。真理の正当化は、個別の認識(信念)を単位にして成立するのではなく、他の認識との相互関係あるいは認識系全体で実現される。真理性とは認識相互の論理的・形式的な整合性、さらには説明・導出・証明などの関係が成立することにある……。RRの真理概念は、この関係主義を真理の整合説と共有し、歴史的に先行するものである。そして、この関係主義が孕む種々の困難も、まさにその徹底的な相対化によって既に乗り越えられていたのである。整合説の困難とは、①「同じ」対象に関して内部整合的な複数個の認識系の成立が可能であり、その場合、どの認識系が(真理)なのか決定できず、結局、相対主義や多元主義を帰結してしまうというものである。RRの立場から見れば、この困難は、整合説的關係主義が各認識系の内部における認識と認識、あるいは認識と系全体との関係は視野に入れても、認識系と認識系との相互関係を捨象し、各認識系をそれ自体で成り立つ閉鎖的な孤立系として実体化していることに起因すると言える。整合説は、認識系内部の個別認識の真理性は関係主義的に理解しても、認識系自体の真理性は実体主義的にしか捉えていないのである。さらに、②整合説には、人間の認識全体の真理性(妥当性・有効性)を基礎づけできないという問題点がある。この認識論が、認識という事象を自存的な独立系・完結系として実体化する一面的な認識内在主義であるからだ。一方、RRは、既述のとおり、認識内在主義に認識外在主義を結合し、人間の認識全体を生の実践的連関において基礎づけようとするのである。このことにより、RRはまた、一面的認識



内在論のさらなる欠点、すなわち③認識系が既成の系として前提にされており、それがどのように成立したのか説明できない、あるいはそもそも説明しようとしないうという欠点を克服する方向を示唆していると言える。同様のことは、④論理的整合性を真理の定義・基準にしている整合説が論理法則・規則をいかなる正当化作業も経ることなく絶対的真理として前提に据えている、つまり真理の定義・基準の前提条件を真理として正当化していないという問題性にも当てはまる。⑤整合説は、自己言及の困難、すなわち整合説自体の真理性を自身の主張する真理基準<sup>II</sup>整合性によって正当化できないというアポリーに陥って自滅する。これに対し、RRは、後述のように、自己言及をむしろ自己の本質構造に組み込んでいるのである。

## 8. ラディカル相対主義と相対主義批判

最後に残された課題は、相対主義批判の代表的なヴァージョンを三例ほど挙げ、それがジンメルのRRにも的中するかどうか、あるいはRRはかかる批判にどのように反撃するのか、反撃し得るのかを検討することである。第一のヴァージョンは、相対主義は結局ニヒリズムや懐疑主義を帰結するから否定されるべきだという、結果主義的批判である。しかし、第一に、仮に思想Aから思想Bが（暗黙裡に前提にされている一定の価値理念Cに照らして）受け入れがたいものであることを理由にAの妥当性を否定することはできない。もし思想Aそのものが一定の根拠に支えられて成立するならば、その帰結がいかに不都合なものであつ

ても、Aそれ自体の当座の妥当性は承認されなければならない。要するに、その帰結が（自己の価値・評価基準に照らして）否定的、破壊的、類落的であるから相対主義は虚論であると決めつけるのは、少なくとも論理的な妥当判断ではないのである。以上はジンメル自身の直接的言明ではないが、価値判断と事実判断の関係に対する彼の基本的スタンスなことから容易に言えることである。

第二に、相対主義から懐疑主義や虚無主義が決して論理必然的に帰結するわけではないのにもかかわらず、その必然性を結論つけてしまうのは、そう結論づける論者自身の内奥が懐疑主義と虚無主義に染まっているからだというのがジンメルの直接的な見立てである。「結局、理論や実践が不確定であり、偶然性が不可避であることを自覚している者の方が、一歩踏み出すのにさえ百パーセントの保証を求めざるよりも、生に対して遥かに大きな確信、遥かに深い信頼を抱いているのである。……アプリアオリの根底には生への密かな懐疑主義が隠れているのである」[GS 9:39]。隠れた懐疑主義者、仮面を着けたニヒリストこそが相対主義に挑発され、そこに自己の震える内面を投影するのである。例えば、フッサールと言えば、ヴァインデルバントと並んで[Kölnke, 1996:474]、皮肉にも相対主義という用語の普及への最大の貢献者になると同時に、相対主義撲滅運動の急先鋒でもあったが、その彼が、精神的な底なし沼の情態に煩悶する中で、厳密な学としての哲学の確立に生の確実な基盤を求めようとする実存的動機について、こう吐露している。「確かな拠り所、確実な基盤、真正なる学問を追求する執拗な努力、そして、結局は客観

的な拘束の回避を宣して憚らないすべての立場と似非理論に対する戦い、そこにおいてこそ私の人生の成否、休戚が決まるのです」[Husserl, 1993: 39]。ジンメルにとって、懐疑主義も虚無主義も、決して相対主義の必然的帰結ではない。それらはむしろ、自己の心底に鬱積する実存的懷疑心、虚無的情態の思想的顕現なのである。したがって、仮に相対主義を根絶やしにしたとしても、この内面心理が存続する限り、懐疑主義も虚無主義も決して消滅しないことになる。

そもそも、仮に絶対的な知が成立したとしても、その絶対主義的な正当化が原理的に不可能である限り、絶対知に固執する思考様式は容易に相対主義や懐疑主義という対極に反転しがちである。「これ〔相対主義的・関係主義的な認識・真理概念〕は決して懐疑論などではない。むしろ認識、倫理、社会に対する普遍妥当的で絶対的に統一的な理念に固執すれば、こうした理念を前にして矛盾や不確実性や力量不足に陥って解決をみないと分かるとき、懐疑的な絶望がもたらされるということである」[GSG, I: 374f.]。また、一般の相対主義や懐疑主義が、真理は絶対的でなければならぬという本質的に実現不能な真理観を絶対的な前提にしたうえでその可能性を否定していることはつとに指摘されることである。その意味で、絶対主義も相対主義も、独断主義も懐疑主義も、その相互対立関係の枠組みの中でのみ成立し、相互に誘発し合っているとも言える。絶対への執着は、直結回路を経るか、相対主義や懐疑主義を辿るかは別として、ニヒリズムへの傾斜を常に内包させているということである。

相対主義批判における第二の定番は、相対主義は「絶対的真理の否定」であり、これは「認識目標＝動機喪失」に繋がり、結局「認識の前進停止」を招かせるというものである。この論理は、認識の根本動機を認識あるいは知性の内部にしか求めないという意味での知性主義、認識内在主義に基づいていると言えるが、ジンメルが、認識を一契機とする生の過程全体に認識の根源力を求めていることは[GSG, 9: 375f.]、すでに示唆したとおりである。さらに、ジンメルの直接の言説ではないが、そもそもどのような知識が重要で有益・有効なのか、どのような認識を生産・所有すべきかについては、日常認識から種々の専門科学にいたるまでそれぞれの知識共同体で暗黙のメタ知として共有されていて、それが哲学者倶楽部内部での真理論議に左右されることは皆無に近い。この点を、かの相対主義批判は完全に錯認している。仮に相対主義が瀰漫して「絶対的真理の探究」という哲学理念が瓦解したとしても、このメタ知が指示する形式での人間の認識の「拡大・深化」はもはや停止しないし、停止できないのである（赤の女王！）。

もっとも、ジンメルは「究極真理の獲得を目指す認識の不断の発展」という理念を放棄したわけではなく、その意味では「古典的」な枠組みに留まっているとも言える。しかし、「究極真理」とは、ジンメルの場合、構成的概念ではなく、あくまでも統一的、発見的な理念である。それは、獲得され所有されるような確定的、完結的な認識内容や認識状態を記述し表示するものではない。むしろ、認識の規範、指針を示す機能性に内実があり、認識過程の中でその機能性を不断に実現していくべき

ものなのである——あたかも究極真理が存在するかのよう。

## 9. ラディカル相対主義と自己適用・自己撞着の問題

相対主義に対する第三の、そしてもっとも強力で常套の反駁法は、相対主義を自己言及によって自己撞着に陥れ自滅させるという論理的手法である。<sup>(9)</sup>これは論敵の主張を逆手にとって論敵を自壊させることから〈逆手論法〉とも呼ばれるが、ジンメルの逆振じの第一段階は、この〈逆手論法〉を再度逆手に用いる〈逆・逆手論法〉から成る。すなわち、相対主義に対して求められる自己適用の検証テストを逆にすべてのメタ認識論的原理に対して要求し、その結果、(a)懐疑主義（あるいは一般的な相対主義）と同様に自己矛盾に陥り自滅するか、(b)絶対主義や批判主義のように自己矛盾は逃れても自己言及を遂行しきれずに空転するか、あるいは(c)それらを避けて自己言及に脅かされることのない例外的地位に逃避するかのいずれかであり、少なくとも自己適用を徹底して遂行・実現できるメタ認識論的立場は——自分の相対主義を除けば——皆無であることを示そうとするのである。<sup>(10)</sup> [GSG, 6: 116f.]。これが第一段階で、第二段階では、自分の相対主義が自己言及による検証テストを通過できることを確認する。すなわち、「それ〔＝相対主義的原理〕は、自身が相対的にしか妥当しないということによって破壊されることはないのである。それが——歴史的、内容的、心理的に——他の絶対主義的、実体主義的原理との交替と均衡<sup>(11)</sup>においてしか妥当しないとしても、自己の対立原理に對するまさにこの関係それ自体が相対主義的關係であるからだ」

[*ibid.*: 117]。ここにはジンメル相対主義の核心が集約的に定式化されていると言える。すなわち、第一に、相対主義自身が（交互形式であろうと相互形式であろうと）対立原理との相補関係でしか成立しないという自己適用的判断・主張が十分に相対主義的であり、その意味で自己一致、自己貫徹して自己撞着に陥ることはない。第二にそれは、相対主義の様々なヴァージョンからジンメルのラディカル相対主義を峻別する種差規定をなしている。

例えば、絶対主義的・実体主義的な真理概念が独断されるとき、歴史的、文化的等々の相対主義が真理の歴史的、文化的等々の相対性を主張して対抗原理の絶対主義を相対化する限り、そしてその限りで、その相対主義は有効で有意味である。しかし、それが自己自身、とりわけ自己の前提条件に対しても徹底して相対主義的にかかわることができないのであれば、自分自身も、絶対主義や実体主義と同様、独断の微睡を貪ることになる。その時、敵対思想と自己との間には、絶対妥当性を僭称する二つの原理の中の〈彼我いずれか一方のみ〉という排他的な二者択一の関係しか残らず、対立関係の相補関係は不可視化する。相対主義には常に、この対抗原理の片面的な相対化と自己原理・前提の片面的な絶対化、つまりは自己相対化の不徹底に陥る危険性が宿している。巷で言う相対主義の正体は、まさにこの中途半端で不徹底な、なぜなら自己自身を徹底的に相対化できない相対主義の未熟ないしは頽落形態に他ならぬ。

ある意味で、RRについてこうも言える。すなわち、直接的には絶え

「自己正当化」自己否定しながら、それによって同時に対立思想も自己の運動に巻き込み、この対極思想の前提条件を否定していくという不断の否定的運動の過程全体が、RRが不断に自己を正当化し、肯定し、実現していく究極形式である、と。さらにまた、人間の認識には、それを直接的、個別的な過程で見れば、その相対的契機を一面的に絶対化し実体化しがちな（メタ認識としての）相対主義と、絶対的契機を一面的に絶対化し実体化しがちな（メタ認識としての）絶対主義とが不可避な側面がある。このある意味では必然的とも言えるメタレベルでの一面的な絶対化や実体化を相互に否定していく過程全体に対するメタメタ認識こそがRRの実質に他ならない、と考えることもできるのである。翻って、現実の思想的過程では、思想体系の形式を取ったか否か、いかなる名称が付与されたかにかかわらず、認識の相対的契機や絶対的契機を無自覚的に絶対化する対立思考は、無自覚的だが即事象的には相互に補完し交替し合い、その限界と一面性を揚棄してきたのであり、RRはこの無自覚的な直接的認識過程についての意識的な反省認識とも評することができよう。

この点で興味をそそるのが、（枠組み）相対主義の自己適用問題に関する次のような考察である「入不二（2001: 47ff.）。すなわち、相対主義は自己適用によって自己矛盾をきたすことはない。自己適用がオブジェクトレベルではなくメタレベルで行われるからである。しかし、自己適用を徹底しようとすると、無限後退を招いてしまう。その結果、「①『枠組み』相対主義の主張は、確定した一つの命題になりえない。②『枠組み』

相対主義自身が依拠している『枠組み』は完結しない」「同、58」。ジンメルの相対主義の場合にも、自己内部での空転の可能性から逃れ得たとしても、対外関係における正当化「相対化の無限循環と無限後退に陥ってしまうのだろうか。この点を考えてみたい。

この問題に対するジンメルのスタンスは、独特に相対主義的である。ジンメルは、形而上学的な、しかしあくまでも統整的・発見的機能に尽きる存在論的仮定としてヘラクレイトス由来の万物相関原理を標榜するが、論理的循環や無限遡及は、（すべてがすべてと相互作用している）というこの普遍的な存在論的構造を把握する際に示される認識様式の制約の論理的な反映であるという解釈を立上げ（GGG, 2: 323ff.; 5: 243; 9: 48ff.; 11: 36ff.）。ジンメルのRRは、既述のとおり、様々なレベルでの様々な認識系が、内容の点でも正当化の点でも、その前提条件を他の認識系に依存し、認識系の間には相互制約・相互前提の構造ないしは過程が成立していると想定している。メタ認識（系）の次元も、この相互的構造・過程から逃れることはできない。ということは、メタ認識の次元でも、その相互的構造・過程が一定の複雑性の限界を超えるとき、既往の論理的な推論規則や思考形式は十分に機能しなくなるということになる。こうした思考形式などが、自己完結系・孤立系の対象にかかわり、自身も自己完結系・孤立系としてしか実現することがない（と見なされている）認識系や認識過程を前提にしているに過ぎないからである。このように、相対主義と絶対主義との間の無限循環・無限遡及の問題を了解する第一のヴァージョンは、それを複雑な相互性にかかわる思考形式



の限界問題として扱うことである。

もう一つのヴァージョンでは、認識主体は不断に自己を客体化し、〈精神〉は絶えず自己の彼岸に自己を立て、自己裁定と自己正当化を繰り返していくのが認識過程の本質構造だとするドイツ観念論の理念が借用される。そして、相対主義的な自己正当化・相対化に見られる無限循環や無限後退が決して不条理なものではなく、むしろ認識過程の本性に即したものであることを示そうとする〔GSG, 6: 18f.〕。ここでは、相対主義の自己適用による自己矛盾・自己破壊は、不断の自己正当化＝相対化の過程における自己正当化を放棄し、停止する場合に生じる必然的帰結として理解されようだろう。

この視点から見れば、件の枠組み相対主義における自己適用の無限後退は、自己適用の徹底から来るのではなく、むしろ自己適用の不断の回避、たえず先送りに起因していることになる。一体に、枠組み相対主義のみならず相対主義一般にとって、自己言及というものは論敵が外部から仕掛けた自縛自滅への罫であり、外面的で否定的な意味しか持たない。また仕掛ける側にとつても、それは敵対思想を論駁するための単なる論理的術策にすぎず、手段の意味しか持たない。これに対し、RRでは、自己適用がむしろその内的で積極的な構造契機をなしていると言える。自己相対化こそがRRの中軸思想であるからだ。さらに、一般の相対主義の自己言及における無限後退では、無限入れ子状態において、例えば二回目の自己適用とN番目の自己適用とを比べてみても、判断の内容の点でも信頼度・確実性の点でも違いはまったくなくと言ってよい。

〈相対主義的主張Tはある枠組みに依存して相対的に真であるに過ぎない〉という主張が入れ子状にひたすら機械的に組み込まれていくだけである。しかし、例えば絶対主義との相互交替という形式での相対主義の無限後退は、その相互交替の繰り返しを通じ、相対主義的認識の内容の質的变化、量的拡大とその妥当性、信頼性の向上が得られることが期待できる。比喩的表現を用いれば、同一平面上の回転運動の無限循環や線分の無限延長と立体空間における螺旋上昇の違いが両者の間にはある。認識の検証・正当化の過程と認識の獲得・修正の過程とが密接に相互作用していると考える点も、RRの見逃せない特質である。この意味で、自己相対化の遡及過程が〈完結しない〉ことがRRの欠陥どころか、むしろその生命力と生産性の保証になっているとさえ言えるだろう。

最後のヴァージョンは、ヘラクレイトス相対主義の核心の一つである万物流転原理の中に認識過程自体も流し込む思考とかわる。「認識自身は絶えず発展していながら、発展を事物の絶えざる〔＝持続的で確固とした〕運命として認識しようとするのは一つの循環であるが、それは、われわれの精神的存在の相対的性格が現れる不可避的な根本的循環なのである」〔GSG, 9: 4f.〕。相対主義それ自体も、認識形式の一つである以上、この絶えざる流動、流転の外に出で立つことはできない。この流れの中にありながら、それでも、いやそうであるがゆえに持続的で確たるものを把握するのはいかにして可能か、——そのアプリアオリな認識条件たるべき機能的思考原理・様式として提示されたのが他ならぬRRであったと考えられる。(六六)

注

- (1) ここでいう認識外在論と認識内在論は、現在の分析哲学で語られるものとは意味を異にする。
- (2) 以下に記述するRRの一連の認識論的テーゼは、RRの社会倫理的・社会思想のテーゼと構造的にアナロジーであり、またその懐胎・展開の時期もほぼ重なる。世界観的（存在論的）相対主義、倫理的相対主義、認識論的相対主義を統一的・総体的に把握し、その相互連関を説明して初めてジンメルのRRの本質が浮き上がってくると思われるが、それはもちろん本稿のよくなしうるところではない。とりあえず「池田、1998」参照。
- (3) 既に学位論文「カントの物理的モノドロジーによる物質の本質」（一八八一年）において、原子概念に関してこの認識の〈両立テーゼ〉〈相互補完テーゼ〉が展開されていることは注目されよう（Ikeda, 2007）。
- (4) ある意味で、これは〈根拠主義〉の相対主義的「再建」の試みとも言える。因みに、グルントマンは、根拠主義の「古典的パラダイム」として、①方法論的先験主義、②反心理主義、③（内省による直接的正当化しか認めない）認識論的内在主義、④個人主義、⑤（認識以外の事実への還元を認めない）非還元主義、⑥反文脈主義、⑦推論主義、⑧（信念にしか正当化力を認めない）信念主義、⑨（心の自律性に訴える）心理意味論的内在主義の基本テーゼを挙げているが（Grundmann, 2001: 13ff.）、ジンメルの相対主義的〈根拠主義〉は（おそらく⑦の一部を除き）これらすべてのテーゼを棄却している。
- (5) この点で、経済学の歴史学派と理論学派の対立についてのジンメルの記述は非常に含著深い。「*レの経済《法則》*」についても想定できるのは、その妥当性は経済情勢の特定の歴史的条件下から、その認識は時代の経済状況の特定の歴史的条件下から導き出せるということである。しかしこうした歴史過程が理解可能なのは、そうした歴史的導出のアプリオリを形成するところの、客観的に妥当する一定の命題と概念を前提に活用するときだけである。この命題と概念の方も

また、先行するさらに以前の歴史的発展に基づき、この歴史的発展の方もさらに、その成立には（それ自体でも認識においても）客観的に妥当する一定のより単純な規範を必要とする等々。二つの方法は《相互に補完し合う》ことが求められるというのは、この一般的なあたりではほとんど意味を持たない要求だが、この場合、次のような特定の原理で置き換えられるのである。すなわち、どの合理主義的公理もその理解には歴史的導出を必要とし、この歴史的発展の「導出」方もまた合理主義的アプリオリなしには起きることはなく」[GSG: 1: 376f]。ジンメルと経済方法論争については稿を改めて論じたい。

- (6) ジンメルの統整主義的（な）であるかのように「原理とヴァイヒンガーの虚構主義的（な）であるかのように」原理の違いについては、ジンメル自身が論及している[GSG: 9: 25f.]。拙稿（Ikeda, 2007: 91）参照。手短に言えば、ヴァイヒンガーが事実上の一致説的真理観に基づく真偽二元論を前提にして〈認識＝虚構〉説を立てるのに対し、ジンメルは〈であるかのように〉「原理を認識の真偽二元を超えた第三の独自の範疇として捉えているのである。ジンメルの場合、現実への認識論的かわり方そのものの多様性、多重性および相補性への問題意識が顕著なのである。なお、ジンメルは、イギリス経験論から吸収し、カントの超越論的現象論を用いて焼き直した記号論的認識解釈を残しているが[GSG: 2: 395; 4: 262ff.]、〈かのうとく〉思考は、この認識理解や先に論及した生のプラグマティズムの真理観などを統一的に把握するうえで、重要な媒介項の役割を果たしていると思われるが、それについては、ここではこれ以上立ち入らない。
- (7) その他、認識とその真理に関する記述的・事実的規定と規範的・当為的規定との区別や関係、真理の定義と基準の関係、誤謬概念、生物異種間における多元世界などの諸問題についての議論は割愛する。
- (8) なお、ジンメルは後年、世界や自己に対するわれわれの態度が二元論に傾きやすい基本要因として、〈我―汝〉という人間学上の原基的關係に言及している

[GSG, 20: 116f.]。

- (9) この自滅論法には、二つのヴァージョンが知られている。一つは、判断・主張される相対主義的内容を自己言及させ、この相対主義的な判断・主張そのものを相対化させ無力化させる論法。もう一つは、相対主義的主張・判断は、それが普遍妥当な判断・主張であろうとする限り、始めから一定の普遍妥当的な概念、原理、規則を前提条件にしていることを暴き出し、それが相対主義的な主張内容と矛盾することを示す手法。ヴァインデルバントの有名な相対主義批判（一八八四年）は後者の手法を用いているが[Windelband, 1921: 115ff.]の種の論法に対するジンメルの反批判は『貨幣の哲学』第二版（一九〇七年）に初めて挿入された。このことをもって、ジンメルは第一版（一九〇〇年）の時点ではヴァインデルバントの批判を知らなかったのではないかと推測があるが[Köhne, 1996: 480f.]、直中には首肯しがたい。むしろ[Richter, 1904]などから触発された可能性を検討する方が成算があるのではないだろうか。いずれにせよ、ここで確認すべきは次の点である。①当時、相対主義と懐疑主義の区別、したがってまた両者に対する批判の区別はかなり杜撰であったし、相対主義批判の二つのヴァージョンの区別もあまり明確に意識されていなかった[König, 1992: 613ff.; Köhne, 1996: 473ff.]。②ジンメル自身、自己の相対主義思想が懐疑主義と混同されることに苛立ちを感じていた。一九一七年(9)四月十七日付リッカード宛書信の中でこう述べている。「私はまた、貴兄が小生を懐疑主義者と見なされているのではないかと疑念を抱いています、そうだとすれば全くの誤解です。もちろん一般の相対主義理解もさほど異なりませんが。すなわち、すべての真理は相対的であり、したがって多分誤謬である、すべての道徳は相対的であり処変われは別のものになる、などといったような陳腐な言説です。私が理解する相対主義は、アインシュタインやラウエの物理的相対主義がそうであるように、全くポジティヴな世界像なのです」[GSG, 22]。
- ③相対主義批判に対するジンメルの反批判は、二つのヴァージョンを明確に意

識しているわけではないが、実質的に両方のヴァージョンに対して有効である。(10) 因みに、例えば、シュリックの真理の整合性論、論理実証主義の有意義性判定テスト、批判的合理主義の反証主義、歴史的相対主義のパラダイム論といった現代の代表的な認識論的原理の大半も自己適用に耐えられないだけでなく、そもそも自己適用を回避ないしは拒否しようとする。

(11) 「交替と均衡」とは〈交互性と相互性〉の謂い。ジンメルはこれを相互作用・関係の二つの形態あるいは類型として捉えている。拙稿[Kameda, 2007: 98ff.]参照。

## 文献

\* 本稿(その二)で記した文献は略す。

- Grundmann, Th., 2001, „Die traditionelle Erkenntnistheorie und ihre Herausforderer“, in: ders. (Hg.), *Erkenntnistheorie. Positionen zwischen Tradition und Gegenwart*, Paderborn: mentis, 9-29.
- Husserl, E., 1975, *Logische Untersuchungen. Prolegomena zur reinen Logik*, Den Haag: Nijhoff.
- , 1983, *Briefwechsel in zehn Bänden*, Bd.IX, hg. v. K.u.F. Schuhmann, Dordrecht/Boston/London.
- 池田光義 1998 「平等理念VS差異理念、社会主義VS個人主義 —— 初期ジンメルの社会倫理思想の一断面 ——」『フォーラム』第16号、跡見学園女子大学文化学会、14-38頁。
- 入不二基義 2001 『相対主義の極北』、春秋社。
- König, G., 1992, Artikel: „Relativismus“, in: J. Ritter (Hg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie*, Bd.8, Basel/Stuttgart: Schwabe, 613-622.
- Richter, R., 1904, *Der Skeptizismus in der Philosophie*, Bd. 1, Leipzig.

